

# 教育活動への 短期ボランティア派遣の活用

拓殖大学国際学部  
教授 佐原隆幸

2013年7月25日

# 拓殖大学の短期ボランティア派遣の概要

1. 学部卒2期生OGが青年海外協力隊(JOCV)として  
ラオスに

ODOPプロジェクトのF/Uのため2011ー13ラオス南部カ  
テウ族の住むホアイフンタイ村に。

2. 2013年3月ー4月に3週間、2年生の2名を派遣

職種:コミュニティ開発

業務:HP作成し女性生産者グループ、生産物、村の  
観光資源を紹介。観光パンフをサラワン県の観光組  
合に配布。

# 拓殖大学側の短期ボランティア派遣実施体制

- 1. **インキュベーション**:
  - (1) **被災地支援ボランティア**、途上国・新興国を中心とした**短期留学**、**学生個人が企画する研修活動**に対する単位認定制度(卒業要件である124単位中の最大20単位を認定可能として設計)。
  - (2) **学部資格**を通じて能力育成。村落開発、農業、青少年活動、環境教育の職種で協力隊に参加できるよう、学部科目の系統的な単位取得を指導。加えて、ボランティアや部活など自主活動を組み込んで現場力獲得を勧奨。
- 2. 短期ボランティア**希望者をロングリスト**に(希望職種、年齢、特技、国内ボランティア経験、部活、サークル、資格、語学スコア。)
- 3. 大学OBOGの協力隊員で現役学部生を**受け入れてくれる希望者をスカウト**(例:ケニア—観光開発、キルギス—環境教育、ルワンダー—農業、セネガル—村落、マレーシアSV—人的資源管理)。拓殖大学ではこれまで約70人の青年海外協力隊(JOCV)OBOGを輩出している。
- 4. JICA本部を通じ在外事務所、青年海外協力隊(JOCV)受け入れ先、JOCV本人の意向確認
- 5. 受け入れてくれたOB・OG, JICAからの報告、本人の成果報告を元に教務委員会にて**単位認定**。12日刻み。MAX36日で6単位。

# 教育活動への短期ボランティア派遣の活用

- 社会人基礎力を備えたグローバル人材育成  
途上国・新興国の現場で
  - (1)前に踏み出す力
  - (2)現状を分析し目的や課題を明らかにする力
  - (3)チームで働く力
- 主体的な学習を促す契機
  - (1)自習しないいまどきの学生(東京大学127大学調査では1日の自習時間は1.7時間。全国大学生協2012年調査では40分)に、自ら継続的に学ぶ姿勢と意欲を育てる。
  - (2)教員が何を教えるかでなく、学生が何を学び取るかを重視する指導—学習者中心型指導—への転換
  - (3)学内報告会、ゼミ報告会講師で周辺学生へのお手本。

## 短期ボランティア参加：学生にとってのメリット

- (1) 異文化接触は、格差・階層・価値観・家族・紛争など社会科学の基礎的な術語を肌感覚で消化し、自らの言葉と枠組みで思考を発展させる起爆剤(実際彼らは能弁になる)。
- (2) 学びの当事者意識の獲得。知りたいことが先にあり知識を呼び寄せて理解する経験(実際、調べ学習で勘が働き目利きになる)。
- (3) 3年で3割が苦勞して入った職場を離職する時代に、学び方を身に付け個人として・社会人としてそのつど関心事項を発展させる方法を習得(何が大事か、求められているか直感的に理解し、学びを発展させリーダーシップをとる)。
- (4) 協力隊の経歴がつくことで、新卒として求職活動をする段階でグローバル人材として認知を得る(進学・就職で現実的利得あり)。
- (5) 世の中多様な生き方があると俯瞰して見られる(相手の主張を相対化してみることができ、以前より打たれ強くなる)。

# 短期ボランティア：大学にとってのメリット

- 建学の理念の再活性化：日清戦争後の台湾、戦前の朝鮮で開発の実務を担ってきた大学の歴史あり。21世紀にこれを国際協力の世界で展開すると謳うが、OB・OG・現役生が現場で協働する絵には**理念を思い起こさせる**アピール力あり。
- 入試広報：オープンキャンパス講師として活用。**学部で協力隊に参加できるのがうれしいとの声多数**。意欲ある学生確保につながっている。
- カリキュラム編成：途上国・新興国を念頭に置いたカリキュラム改革を進めることに広い支持。
- 企業広報：途上国・新興国の現場で機能する人材を育成しているという**グローバル性を持ったイメージの投影**。過去3年就職率が着実に向上(国際学部は90%越え)。
- 大学院改革：高い能力の認められるものには**1年で修士号**を与える制度あり。協力隊の現場の課題を扱った実証的な論文が出せれば、この制度を具体的に展開可能。大学院への優秀な学生のリクルートをさらに進められる。

# 今後

- 毎年1件の確保(2013年度:マレーシア国立高等技術訓練センター、OBSV支援一人的資源管理)
- 2012年度ラオス案件の展開
  - －学部生によるF/U企画。ホアイフンタイ村の特産織物を買付け、同織物の加工を南三陸女性被災者グループに委託。物販収益をラオス側および南三陸に提供。収益の一部を回転資金として活動を継続する企画。学内コンペを勝ち抜き初年度の予算は確保。その後の資金支援を外部団体と交渉中。
  - －スタディツアー:大学のプログラムとして希望者を募り一村一品活動体験ツアー編成(企画段階)
- 草の根技術協力への発展

数年後には、複数の短期ボランティア派遣実績を積み上げ、条件のよい現場を選んで、草の根技術協力などより大規模な支援を企画する。すでに拓殖大学国際学部では2004－06年度にJICAの草の根技術協力の支援型一をジャカルタにて成功裡に実施済み。現在も識字存続。拓大生は毎年一回対象村訪問。日本語授業展開。

案件名:拓殖大学と姉妹校ダルマプルサダ大学とのパートナーシップによる都市貧困対策リーダー育成事業(都市貧困対策モデルプロジェクト実施を通じて)

[http://www.jica.go.jp/partner/kusanone/shien/ind\\_01.html](http://www.jica.go.jp/partner/kusanone/shien/ind_01.html)

# 短期ボランティア(現役学部生)の派遣



- 現役生とOB/OGの協働→先輩後輩の絆の強化
- 主体的学び方の獲得→実社会を生き抜く力
- インキュベーションの活性化→行動を伴う学びの展開
- 入試・カリキュラム改革・就職の改善→学部の活性化  
→大学院の活性化→明治より国際大学たろうとした拓殖大学の理念の再活性化→拓大ルネッサンスの実現